

東京都障害者スポーツ大会「陸上競技・卓球競技」

2019年度スポーツボランティアプログラムのプレ企画として、5月25日(土)、26日(日)、6月1日(土)の3日間、駒沢オリンピック公園総合運動場で開催された、東京都障害者スポーツ大会「陸上競技(知的部門)・(身体・精神部門)」及び5月25日(土)に武蔵野の森総合スポーツプラザメインアリーナで開催された、東京都障害者スポーツ大会「卓球競技(身体・知的・精神部門)」に本学の学生が参加し、ボランティアとして活動しました。

「卓球競技」の活動には3人、「陸上競技」 の活動には16人の学生が参加し、内、11人 の学生は、同大会に初めてボランティアとして 参加しました。

·5/25:卓球競技



「卓球競技」は、アリーナ全体を使用し、身体、知的、精神部門の各試合が一斉に行われていました。

今回首都大生が担当したのは、身体部門の各試合終了後に試合記録の速報を掲示する役割です。大半の試合がトーナメント形式で行われるため、試合の勝敗や勝ち上がった選手の情報を求めて、多くの方が掲示板の前に集まっていました。学生たちは、卓球の競技経験がなく、ルール等の知識はあまりありませんでしたが、一緒に活動した記録を集約する係のスポーツ指導員の方々が丁寧に教えてくださったため、それぞれが不安なく活動し、適切かつ速やかに記録の掲示を行うことができました。

「卓球競技」では、トーナメントが進めば進む ほど、同時に行われる試合数が減り、一つひと つの試合への注目度が上がっていきます。決勝 戦では、球が跳ね返る小さな音がアリーナ全体 に響きわたるほど、皆息をのんで試合を見守っ ていました。

学生たちは、「球を目で追えなかった」「球の スピードに圧倒された」と話しており、活動を通 して、初めて間近で見た卓球の試合に感動し ていました。

·5/25、26: 陸上競技(知的部門)



この2日間は、知的障がいのある方が対象の 陸上競技の大会でした。首都大生は、2日間 とも「ハガー」という役割を担いました。「ハガー」 は、知的障がい部門ならではの役割で、走競 技において、ゴールしたことに気付かない選手 がおられる場合があるため、ゴール付近で待機 し、ゴールした選手を受け止め、表彰場所まで の誘導を行う役割です。ゴールして走りぬけた 選手に「お疲れ様でした!こちらです」などと声 をかけながら、待機場所まで誘導しました。選 手と直接、接することができるので、選手の嬉 しそうな表情、悔しそうな表情、力を出し切った 表情、ライバルの健闘を称える姿などを間近で 感じることができ、なかにはお話ししてくださる選 手もおられて、学生たちは、とてもやりがいを感 じることができたようです。

今回の活動が初めてのボランティア活動だという学生も多かったのですが、「障がい者スポーツという特別なスポーツではなく、アスリートとしてかっこいいと思った」「大勢の裏方の人の支えがあって大会がつくられていることが分かった。自分もその一員になれてよかった」などの感想が聞かれました。学生たちは、障がいの有無に関係なく、自分のもっている力を最大限に出し、チャレンジするスポーツの魅力と、"支えるスポーツ"としてのボランティアの魅力を感じることができたようです。

スポーツボランティアプログラム

東京都障害者スポーツ大会 「陸上競技・卓球競技」 **起生**

2019/05/25-26、 06/01

·6/1:陸上競技(身体·精神部門)



「陸上競技(身体・精神部門)」の活動では、補助競技場で行われた「投てき競技:ソフトボール投」において、選手の招集・誘導係を首都大生が担当しました。

「ソフトボール投」では、一日を通して、肢体、視覚、聴覚、内部・精神等、障がい種別ごとに試合が行われました。同じ肢体不自由のカテゴリだとしても、立位で投てきを行う選手がいたり、車いすに乗って投てきを行う選手がいたり、さらに、自ら持参した投てき台を使用して投てきを行う選手がいたりと、選手によって競技スタイルは様々です。

学生たちは、役割として与えられた招集・誘導に加えて、誘導の際に選手へ励ましの声をかけたり、表彰された選手を拍手や声かけで祝福したりして、積極的に選手とコミュニケーションをとっていました。

一方で、多様な障がい種別の選手と接したこともあり、初参加の学生の多くは、どのようにコミュニケーションをとればよいのか分からなかったと話していました。選手とお話しすることが必須の活動ではなかったのですが、いざ自分の考えや思いを伝えようとした時に、どのように伝えればいいのかを迷うことがあったそうです。

最後に首都大生だけで集まり、感想等を話した際には、「障がいのある方が周りにいることを特別だと思っているわけでもなく、自分は自然に接することができると思っていたけれど・・・」と話していた学生もおり、無意識のうちに自分が障がいのある方との距離をつくっていたという気づきを今回の活動を通して得ることができたようでした。